

## 雨粒

そろそろさみだれの季節がやつて来る。

同じく雨ではあつても、ふしぎに季節や環境によつてその感じは非常にちがつてゐる。

それで我國では雨にいろいろな名まへがつけられてゐる。春さめ、さみだれ、しぐれ、驟雨、ゆふだち、霧雨、小隼雨、その外にもなほあるであらう。さう云ふ雨のいろいろな感じのなかには、雨の音がかなりな役目をはたらいてゐる。さみだれの静かに降りそよぐ音とか、ゆふだちの激しくものを撃つ音とか、音もなくひつそりと濡らしてゆく小隼雨とか、みんなそれぞれの趣きをそなへてゐるのである。

ものしづかに雨の音を聞いてゐると、いろいろな記憶が心のなかによみかへつて来るのも、一つのなつかしげな風情である。

ところで、ちよつと見方を變へて、雨といふのはたくさん水粒が空から生れて、地上に落ちて来るものだと思つて出ると、恰もそれらが人間の運命を象徴してゐるやうにも思はれる。かういふ水の粒にもいろいろの大きさのものがある。眼で見ると、雨は普通に細い線につながつて見える。雨の落ちるのはそんなに速いのではないが、それでも人間の眼はその粒を見分けるわけにはゆかない。

そこで雨粒の大きさを測るのにはどうしたらよいか。氣象學では、そのためにちよつとおもしろい方法をつかつてゐる。それは雨粒の落ちるのを吸取紙で受けて、紙の上に滲み擴がる面積を測るのである。それから別に半径のわかつてゐる水粒を同質の吸取紙に滲ませてその面積を雨の場合と比較すれば、これから雨粒の大きさを測ることができようと思ふのである。

この方法は科學的にはさほど精密だとは云ひ難いが、雨粒の大きさなどは個々にそれ程

精密に知る必要はないのであるし、大體の平均がわかればよいのだから、これでも十分に間に合ふのであらう。私がおもしろいと云ふのは、雨が何事もなく落ちてゐる間は、人間の眼でその大いさなどはつきりとわからないのに、紙で受けるとそれがつきり見えるやうになると云ふことである。生きてゐるうちはさほどとも思はれない人間が死ぬと急にその偉さが世間に認められると云ふことなども、之と似てゐる。

すべての事はこれと同じである。たいした變り方もなく續いてゐる間は、さう云ふ事があるとお承知してゐながら、人間はとかくぼんやりと見過ごすだけである。そしてそこに何かの事變が起ると、始めてその正體を認めて、今更のやうに慌て驚くことすらある。また病氣などの場合でも、身體のなかに潜んでゐる間は、たとへ自分で承知してゐても、まあ、どうにかなつてゆくと、たいして氣にも留めずゐるが、それが何かの反應を起すやうになると、これではならぬと、今更その重大さを氣にするやうになる。これらは人間の通性で仕方のない事だと云つてしまへば、それ迄である。併し事の起らない先にその赴くところをはつきりと見究めることこそ、社會や人生や、その他すべての仕事にとつてどれ

程大切であるかわからない。

雨粒の大いさを吸取紙で調べるなどは、謂はゞ昔風の觀測法である。もつと近代的方法としては、雨粒の落ちてゐるのを瞬間的に寫眞にとればよい、さうすれば大いさもわかるし、形などもはつきりする。普通に人間の眼がぼんやりと見過ごしてゐるのを寫眞はもつと鋭敏に印してくれる。つまり何事に對しても、表面的な感覺的觀察に終らせることなしに、もつと科學的な方法をそこに利用することが必要なのではないか。雨をたゞ直線的に降るものと呑氣に見てゐるだけではいけない。何かしら大事なことだと察したなら、それを出来るだけ科學的に突きつめる近代的な方法を講ずることが大切なのである。この頃のはやり言葉で云へば、認識といふのであらうが、寫眞のレンズが歪んでゐると、とんだまちがつた認識を結果しないとも限らないから、それも十分に注意しなくてはならない。

雨粒のやうなものは直接に寫眞にとつてその形を見ることができなければならない。小さいものになると、それができなくなる。例へば物理学で取り扱ふ放射性物質からの放射線のやうなものである。これらも雨粒を吸取紙で受けとるように、何かの物質に當てゝそ

の作用で調べることはできるが、これでは途中の有様がわからない。そこで、ウィルソンの霧箱と云ふものをつかつて巧妙な方法でその途筋を寫眞にとると、途中の通路がはつきりわかる。ウィルソン霧箱といふのは、物理學の書物を見れば説明してあるが、つまり水蒸氣を過飽和にする一種の装置で、そのなかへ放射線を通すと、それが通過した場處にはイオンが出来、その周りに水蒸氣が凝結して水粒となるから、これを寫眞にとると放射線の通路が示されるのである。ちやうど雨粒を絲につらねた恰好でこれもあながち雨粒の話と縁がないとは云はれない。

このウィルソン霧箱の方法といふのは、説明を聞けば何でもないが、いかにも巧妙なものだと云はなくてはならない。放射線をつくつてゐる  $\alpha$  粒子だとか電子だとかは、どんなに小さなものであるかは、物理學ではつきりわかつてゐる。そんな眼に見えぬ小さなものの通路を寫眞に見せるなどと云ふことは實に驚くべきことだと思はれる。そこで普通にはとても正體のわからないと考へられる事柄でも、何かの工夫をしてせめてその輪廓をでも明らかにすると云ふことが、このウィルソン霧箱のやうに出来たなら、實にすばらしい事

ではあるまいか。

雨粒を見ながら私はこんな事をいろいろ考へてゐた。この頃のやうに世間の人心が何かしら不安に襲はれてゐるときに、衝撃につき當るまでぼんやり待つてゐると云ふだけでは、まことに心細いものである。

それから今ではどこの學校にも試験があつて、試験間際になると、學生が頻りに頭をなやますのであるが、これもちやうど雨粒の大きさを吸取紙に滲ませるやうなもので、そんな事をしないで、ふだんから何かもう少し賢明な方法で學力を檢べるやうにするのが近代的な教育であると私は思ふ。雨粒の身になつて見れば、足許に吸取紙が見えてから急に騒ぎ出したつて、本當に眼のある人から見られたら、それはいかにも愚かな仕業にうつるであらう。

(昭和十一年五月)